

ばく りゅう
麦粒

2024. Spring

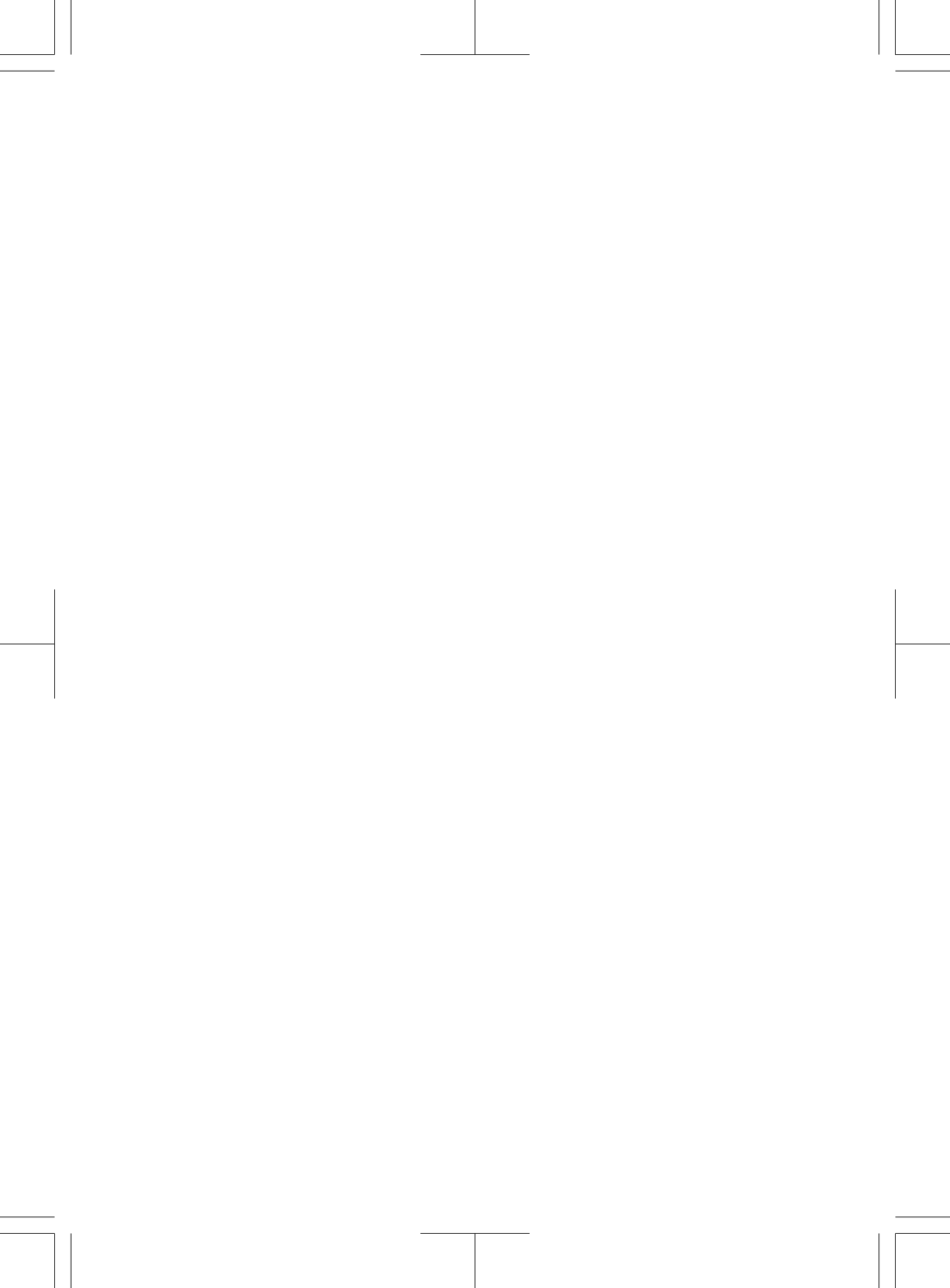
麦粒／NO. 143

発行・キリスト教センター

目 次

かけがえのない命	小 室 尚 子 (3)
あなたに与えられたタラント	赤 楚 治 之 (8)
新入生の皆さんへ	(12)





かけがえのない命

小 室 尚 子

「天の国は、ある家の主人に似ている。主人は、ぶどう園で働く労働者を雇うために、夜明けとともに出かけて行った。彼は、一日につき一デナリオンの約束で、労働者をぶどう園に送った。また、九時ごろ行ってみると、何もしないで広場で立っている人々がいたので、『あなたがたもぶどう園に行きなさい。それなりの賃金を払うから』と言った。それで、彼らは出かけて行った。主人はまた、十二時ごろと三時ごろに出て行って、同じようにした。五時ごろにも行ってみると、ほかの人々が立っていたので、『なぜ、何もしないで一日中ここに立っているのか』と言った。彼らが、『誰も雇ってくれないのです』と答えたので、主人は、『あなたがたもぶどう園に行きなさい』と言った。夕方になって、ぶどう園の主人は管理人に言った。『労働者たちを呼んで、最後に来た者から始めて、最初に来た者まで順に賃金を払ってやりなさい。』そこで、五時ごろに雇われた人たちが来て、一デナリオンずつ受け取った。最初に雇われた人たちが来て、もっと多くもらえるだろうと思っていたが、やはり一デナリオンずつであった。それで、受け取ると、主人に不平を言った。『最後に来たこの連中は、一時間しか働かなかったのに、丸一日、暑い中を辛抱して働いた私たちと同じ扱いをなさるとは。』主人はその一人に答えた。『友よ、あなたに不当なことはしていない。あなたは私と一デナリオンの約束をしたではないか。自分の分を受け取って帰りなさい。私はこの最後の者にも、あなたと同じように支払ってやりたいのだ。自分の物を自分のしたいようにしては、いけないのか。それとも、私の気前のよさを妬むのか。』このように、後にいる者が先になり、先にいる者が後になる。」

(新約聖書 マタイによる福音書 20章1～16節)

イエス・キリストが話された譬え話です。

このお話、初めて読む人は、「これは不公平だ」と思われる方が多いと思います。何度読んでも不公平だという印象から抜けきれない方もいると思います。皆さんはいかがでしょう？

でもこういう読み方はできませんか？

不公平だと思うのは、自分を夜明けから働いている労働者の立場に置いてこの話を读んでいるからではないでしょうか。自分が最後に雇われた労働者だったらどうでしょう。全く違う感想がでてくるのではないのでしょうか。

どうも私たちは、こういう譬え話を聞くと、自分を、できる人（夜明けから働いている労働者）の立場に置いて考える傾向があるようです。たとえば（ルカ15章）「群れから迷い出た1匹の羊の譬え」を思い出してください。最初にその話を聞いた時、自分を迷い出た羊として聞きましたか？ 自分は迷い出していない羊として聞いていませんか？ 同じ15章にある「放蕩息子のお話」も、自分を、放蕩に身もちくずした弟の立場ではなく、お兄さんの立場に置いてみていませんか？

今日の、この話を聞いて、自分は最後に雇われた労働者であつたらどうなのか、

とは考えないのではないのでしょうか。ですが、実はこのイエス・キリストの譬え話は、最後の人に焦点が当てられているのです。自分が、最後の労働者だったらどんなに嬉しいでしょうか？ 明日は、ご主人のために、朝からしっかり働こう！という気になるでしょう。

もう一度この話全体を見てください。労働者達はその日の仕事を得るために朝早くから広場に集まっていました。労働者たちの一日の賃金は1デナリオン。この話ではそれが正規の労働契約です。夜明けとともに雇われた労働者たちは、意気揚々と働きの現場に向かいました。9時頃、そこにまだ労働者達が残っていました。彼らは最初に選ばれた人々と比べて労働力としての価値が低いと見なされたのでしょうか、そのために雇われることなく「何もしないで」います。失業状態という意味です。失業状態である彼らは自分の誇りも失いかけています。しかしぶどう園の主人は、彼らと契約を結びました。主人は、12時ごろと3時ごろにまた出て行き、同じようにしました。そこに残っていた人たちの労働者としての価値は更に低そうで、日没までの労働時間も限られています。でも主人は前の人々と同じように労働契約を結びました。5

時頃にもまた出て行きました。まだそこに立っている人々がいます。「なぜ、何もしないで一日中ここに立っているのか」と訊ねると、「彼らは、『だれも雇ってくれないのです』」と答えました。そこに残されていたこの人々については、言うまでもなく、彼らは、失望と虚しさの中に立ちつくしていたのです。労働が終わる時間も迫っていましたので、主人は急いで彼らに仕事を与えました。

この譬え話によりますと、最初の人には「一日につき一デナリオン」の約束をしたことがはっきり言われています。次の人達（9時、12時、3時）にも「ふさわしい賃金を払う」と言われています。が、最後の人たちについては正式な報酬の契約を交わしたとは言われていません。このことに注目しておいてください。

さて、最後にぶどう園に送られて来た人々が1時間くらい働いた頃、その日の労働時間は終わりました。主人は、最後に来た人々から初めて、最初に来た人たちにまで順々に賃金を支払うように監督に命じると、最後に来た人たちに1デナリオン、その前の人にも1デナリオン、その前の人にも・・・そして夜明けから来て働いていた人々にも1デナリオンが支払われました。全員が1デナリオンで

す。

けれども朝早く来た人たちは不平を言いました。1時間しか働かなかった人たちと、まる一日、暑い中で働いた自分達と同じ賃金だなんて、不公平だと彼らは言ったのです。皆さんが思うとおりです。主人は約束を違えていないのですが。でも私たちにも彼らの不平は当然だと思われれます。働きに応じて支払いを受けるのが私たちの常識であるからです。しかし主人は、「友よ、あなたに不当なことはしていない。約束通りにあなたに支払った。そしてわたしはこの最後の者にもあなたと同じように支払ってやりたいのだ」と答えるのです。

これは、主イエスが語られた「天の国」のたとえです。神が私たち人間をどれほど愛しておられるのかを語る話で、人と自分を比べて、計算で考える、人間社会の話ではありません。神の恵み（愛）は、私たちの働きの結果として与えられるのではなくて、全ての人に分け隔てなく与えられるということです。一人ひとりが創り主である神にとって大切なかけがえない命だからです。

この譬えで示されている「賃金」は、神の恵みの愛なのです。力なく弱いものでも、神にとっては皆等しくかけがえの

ない命なのです。自分で自分の価値を決めて「自分なんか・・・」と諦めることも必要ありません。それぞれ一人一人には、その人にしかできないことがあるのです。神さまはそれを価値あること、大切なこととして認めてくださっているのです。私たちは等しく生かされている大切な存在なのです。

ここで、主人から皆に与えられる1デナリオンは、さっき「神の恵み」と言いました。それは、もっと深く考えて行くと、イエス・キリストのことではないでしょうか。神は私たちを愛して、真に生きることが出来るように独り子イエスを一人一人のために送って来てくださいました。キリストが飼い葉桶に眠ってくださったということは、どんなに社会から忘れられた、力ない弱い人であっても神にとっては皆等しく愛する人、どんなに社会で虐げられている人たちも忘れられることなく、その私たち一人一人と共に生きてくださることを示すために神は独り子を飼い葉桶に送られたのです。そしてみんなが神の許で生きようになるために、神さまの許に戻ってくるようにと一人一人を招いておられるのです。私たちは等しく神さまに憶えられ、生かされている大切な存在なのです。

最後に、神さまの御心を知る人は、人を妬んだり、分け隔てしてはいけないことを憶えてください。最初の労働者達は、主人に選ばれて喜んで働いていたはずで、ところが後から来た人達と自分を比べた時に主人の優しい心を忘れて、自分中心になってしまいました。自分の方が能力がある、体力がある、もっと報酬をもらっていいはずだと言い出しました。最初に声をかけて、ぶどう園に招いてくれたのは主人の方であることを忘れてしまいました。

神の御心を知る人は、ほんとうは、神のように人を愛する人であるはずで、神はそれを期待しておられるでしょう。せっかく先に神さまのもとにきたのに、神の御心を忘れてぶどう園での喜びを失ってしまっただけは何にもなりません。(16節)「後にいるものが先になり、先にいるものが後になる」というのはそういうことです。

神は、どんな人の生き方も愛し導こうとされます。忘れられる人は一人もいません。一人ひとりが父なる神にとって大切なかけがえのない命だからです。力なく弱いものでも、神にとっては皆等しくかけがえのない命なのです。それぞれ一人一人には、その人にしかできない使

命と生きる価値があるのです。信仰の世界は打算の世界ではありません。私たちは等しく生かされている大切な存在なのです。そして神は、神の御心を知る皆さんには、イエス・キリストに倣って神を愛し、人を愛して生きて欲しいと望んで

おられます。名古屋学院が大切にしていた「敬神愛人」の精神はそこからでています。どうか神の御心を心に刻んで、毎日の学びを、二度と繰り返さない一日一日を、意義あるものとしていただきたいと思います。

(こむろ なおこ 金城学院大学 学長 2023.11.7 チャペルアワー奨励)

あなたに与えられたタラント

赤 楚 治 之

「天の国は、ある人が旅に出るとき、僕たち^{しもべ}を呼んで、自分の財産を預けるようなものである。それぞれの力に応じて、一人には五タラント、一人には二タラント、もう一人には一タラントを預けて、旅に出た。早速、五タラント受け取った者は出て行き、それで商売をして、ほかに五タラントもうけた。同じように、二タラント受け取った者も、ほかに二タラントもうけた。しかし、一タラント受け取った者は、出て行って穴を掘り、主人の金を隠した。さて、かなり日がたってから、僕たち^{しもべ}の主人が帰って来て、彼らと清算を始めた。まず、五タラント受け取った者が進み出て、ほかの五タラントを差し出して言った。『ご主人様、五タラントをお預けになりましたが、御覧ください。ほかに五タラントもうけました。』主人は言った。『よくやった。良い忠実な僕^{しもべ}だ。お前は僅かなものに忠実だったから、多くのものを任せよう。主人の祝宴に入りなさい。』次に、二タラント受け取った者も進み出て言った。『ご主人様、二タラントをお預けになりましたが、御覧ください。ほかに二タラントもうけました。』主人は言った。『よくやった。良い忠実な僕^{しもべ}だ。お前は僅かなものに忠実だったから、多くのものを任せよう。主人の祝宴に入りなさい。』一タラント受け取った者も進み出て言った。『ご主人様、あなたは蒔かない所から刈り取り、散らさない所からかき集める厳しい方だと知っていましたので、恐ろしくなり、出て行って、あなたのタラントを地の中に隠しておきました。御覧ください。これがあなたのお金です。』主人は答えた。『悪い臆病な僕^{しもべ}だ。私が蒔かない所から刈り取り、散らさない所からかき集めることを知っていたのか。それなら、私のお金を銀行に預けておくべきだった。そうしておけば、帰って来たとき、利息付きで返してもらえたのに。さ

あ、そのタラントンをこの男から取り上げて、十タラントン持っている者に与えよ。誰でも持っている人はさらに与えられて豊かになるが、持っていない人は持っているものまで取り上げられる。この役に立たない僕^{しもべ}を外の暗闇に追い出せ。そこで泣きわめいて歯ぎしりするだろう。』

(マタイによる福音書 25章14～30節)

皆さん、こんにちは、学長の赤楚です。赤楚っていう珍しい名前が、ローマ字で書くと「A-K-A-S-O」で、反対から読むと「O S A K A」になります。ちなみに、このことを先生は中学2年の時に「発見」しました。その大阪で生まれ育ったんで、大阪のことば（北河内方言）が、自分を飾らずに表現できる一番の手段だと思っています。せやから、今日はみんなの心に、飾らずに先生の伝えたいこと届けるために、大阪弁でしゃべらせてもらうで。ええか。

今、司会者に読んでもらった「タラントン」の話は、新約聖書の「マタイによる福音書の25章14節から30節」なんやけど、これを読んだことのある人、手を挙げてみて。してるかな？ 先生は、高校から大学、大学院とずっとキリスト教主義の学校で学んできたんだけど、この、タラントンの話を初めて読んだのは、高校の時の「宗教」の授業で、担当の先生が解説してくれたんやけど、「なんかよ

くわからん話やなぁ」と感じたこと覚えてんねん。それ以来、何度も読んで、今は何が言いたいのかわかるけど、それでも突っ込みどころがいっぱいあるなぁと今でも思ってます。もし、興味があったら、時間のある時に、チャペルに戻ってきて、備え付けの聖書でこの箇所を読んでみてみ。

この話は、かいつまんで言えば、イエス・キリストが天の国ってこういうふうだというたとえ話で、主人と3人のしもべがいて、この3人のしもべに主人が、ひとりには5タラントン、もうひとりには2タラントン、最後のひとりには1タラントンを与えて、主人は旅にでかけるわけよ。その主人が帰ってきたら、5タラントンの人の財産はその5タラントンをもとに商売して5タラントン儲けて計10タラントンになってて、2タラントンの人は2タラントン儲けて計4タラントンになってたんやけど、最後の1タラントン預かったひとりだけは商売に失敗し

てお金なくなったらあかんから、1 タラントンを土の中にいれたままにしておいたんやね。その人は、主人に「私はお金を土の中に埋めておりました。安全なところで守っておりました。」と訴えるけど、主人は怒んねん。この話って、それだけ聞くと、商売つまりお金儲けしないとあかんでというように読めるやろ？

「タラントン」というのは当時の貨幣の単位なんやけど、現在の価値では1 タラントンが2000万円くらいで、20年働いてようやく手に入るくらいのお金やったみたいやね。そうすると5 タラントンというのはすごいお金になるわけよ。そんなこと考えたら、この話って、お金儲けの大切さについて語ってるように思うわな。

でもな、実はこの話、そんな「金儲けの大切さ」の話じゃないねん。この話は、自分の持ってるもの、つまり（神から与えられた）才能を、しっかりと大切に育てていかんなあかんでという話やねん。

「タラントン」は、英語の単語「talent（＝才能）」の語源やねんけど、この話が伝えたいのは、お金の話やなくて、人間がそれぞれ与えられている「才能」を無駄にしたらあかんでということやねん。最後の1 タラントンの人は自分の持って

いる才能を使わなかったので主人に叱られるっていうところがこの話のポイントなわけよ。

さて、ここからみんなに身近な話に置き換えて考えてみよな。みんなが大学に入る時に、例えば、名古屋学院大学を受験する時に、偏差値っていうのを気にしたんちゃうかな。偏差値っていうのは、今の受験システムの中で、予備校が各大学につけていくもので、その数値で、「A 大学は偏差値の高い大学や」とか「B 大学は低いな」とか、偏差値で大学を判断する風潮になってるわな。でもな、そんな偏差値なんか、たとえば自分を測るほんの一部にすぎないってこと忘れたらあかんで。「偏差値のいい大学に入れた」ということは「受験勉強がよくできた」ということで、確かに、それは一生懸命勉強した結果やと思うし、それはそれで立派なことやと思う。けど、それはあくまでも過去の自分の話やろ？ 大切なのは、これから自分の才能をどう育ててゆくかであって、過去の成績（偏差値）なんかやないやろ？ 自分の持ってる才能をどう活かすか、どう伸ばすかということが、もっと重要やろ。言いたいのは、偏差値で大学を判断して、自分の可能性に自分自身で「リミッター（制限）」を

設けるなんて、これって、めっちゃ「もったいない」、一番若者らしくないことやと思わへんか？

みんなには無限の可能性があるねん。その可能性を拓くために一生懸命やってみる、これが何よりも大切なことちゃうか。「人事を尽くして天命を待つ」って言葉、聞いたことがあるやろ。とにかく一生懸命やってみる。それがどうなるかはその次の話や。最終的にはそれは「神のみぞ知る」やから、どうなるかはわからへん。でも「自分ができることを一生懸命やる」ってこれほど人生に意味をもたらすものはないと思うねん。まだ自分でもわかってないかもしれない、他の人とは違う素晴らしいタラントンをみんな持ってんねん。そのタラントンをしっかり増やしていくことが、みんなの行く道、若者の姿とちゃうやろか。

この大学の4年間で、自分の可能性をしっかり磨く。そのためには、まず一歩踏み出すこと。そしてその行動によって跳ね返ってくるいろんな情報をキャッチして、たくさんのことを学んで、次の行動に反映させんねん。それが大学での学びやねん。じっと待ってるだけでは「本

物の大学生」にはなられへん。先生はみんなにこの大学で、行動（チャレンジ）してそこからいろいろなことを学んでいく「本物の大学生」になってもらいたいねん。

ある人はラッキーにも「君はこういう才能があるから、こうやりなさい」そんなアドバイスを受けることがあるかもしれないけれど、普通はそんなことは無いわな。そうしたらどうするかっていうと、自分でその可能性を探してゆく、広げてゆく、育ててゆくっていうことや。それには、じっと待っていてはだめで、一歩踏み出す、そこやねん。

先生はこの大学に赴任して34年経ってるけど、本当に良かったと思ってる。その一つはこの大学の学生のすばらしさや。それぞれが本当に素晴らしいタラントンをもってるから、絶対、「本物の大学生」になって、自分を磨いて、可能性を広げてほしいを思ってるねん。「目指せ、本物の大学生！」や。

今日はみんなと「マタイによる福音書25章」を読みました。また、もう一度チャペルに戻ってきて、備え付けの聖書を読んでみたらどうかな。

（あかそ なおゆき 名古屋学院大学 学長 2023.10.27 チャペルアワー奨励）

新 入 生 の 皆 さ ん へ

敬 神 愛 人



(創立者 F.C.クライン)

「先生、律法の中で、どの戒めが最も重要でしょうか。」
イエスは言われた。『心を尽くし、魂を尽くし、思いを
尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』これが
最も重要な第一の戒めである。第二も、これと同じよう
に重要である。『隣人を自分のように愛しなさい。』
(新約聖書 マタイによる福音書 22 章 36～39 節)

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。これから皆さんは、
この名古屋学院大学でのキャンパスライフを過ごしていくことになり
ます。その上で、この大学の一員となった皆さんにぜひ知っておいてい
ただきたいことを簡単にお伝えしたいと思います。

私立の学校には、独自の理念、「建学の精神」というものがあります。
名古屋学院大学の建学の精神は「敬神愛人」です。これは、キリスト教
の聖典である「聖書」の言葉に由来しています。

敬神 … 神を愛し敬うこと。

愛人 … “隣人” を自分のように愛すること。

イエス・キリストは、この二つを大切にしなければならないと人々に
教えました。隣人とは、近しい人だけでなく自分以外のすべての人を指
すと理解されます。神は私たちを愛してくださっています。その愛をも
って、私たちは神を愛し敬い、また隣人愛として他者のためにも愛を向
けていく。これを本学の教育の基本にしているのです。

1883 年、アメリカからフレデリック・チャールズ・クライン (F. C.
Klein) という宣教師が、キリスト教の伝道と英語教育を目的として来
日しました。彼は、横浜に英語学校や教会を設立し、1887 年、次の着
任地として妻メアリーとともに名古屋にやってきました。彼らは、名古
屋に着いたその日から英語の学校を開いたと伝えられています。その
時、クラインがその教育の基本理念として掲げたのが、「敬神愛人」だ
ったのです。

「名古屋英和学校」と名づけられた彼らの学校は、1951 年、「学校法
人 名古屋学院」と名称を改め、そして 1964 年、わたしたちの名古屋

学院大学が誕生することとなります。

新入生の皆さんは、これから数年の間、本学の学生として様々なことを学んでいくことになりますが、勉学や研究、課外活動に勤しむのと同時に、本学の建学の精神「敬神愛人」という言葉を心に留めつつ、人間的に成長していくこともぜひ目標にしてください。

皆さんが、自分自身のことも大切にしつつ、他者を愛していくことができますように…。また、人間同士のかかわりだけでなく、人知を超えた存在に心を向けられるような謙虚で広い視野を持った人間性が、この大学でのキャンパスライフを通して養われていきますように…。

◆ チャペルへの招き ◆

各キャンパスに設置されている「チャペル（礼拝堂）」では、毎週、「チャペルアワー」というキリスト教の礼拝を行っています。聖書の御言葉と祈りを中心に、教職員や近郊の牧師さんたちによる奨励を聴くひと時です。チャペルアワーを通じて、世界の大きな文化の源流の一つである「キリスト教」という宗教の教えに触れ、これからの時代を生きていく上で大切な何かを感じていただければと考えています。

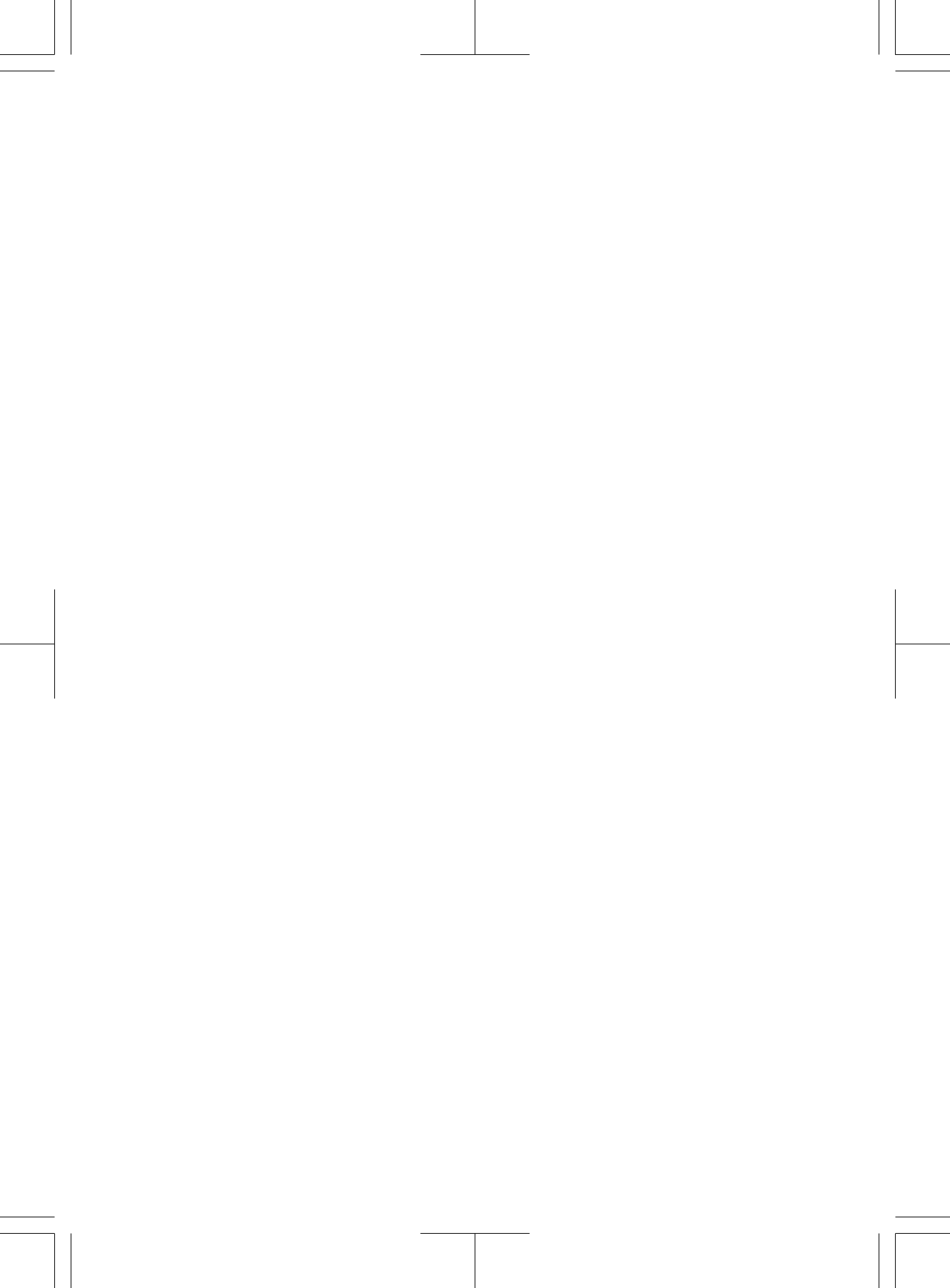
＜名古屋キャンパス	火曜日	13：00～13：30
しろとりチャペル＞	木曜日	12：30～12：45
	第一月曜日	8：30～8：40
＜瀬戸キャンパス チャペル＞	水曜日	13：00～13：30

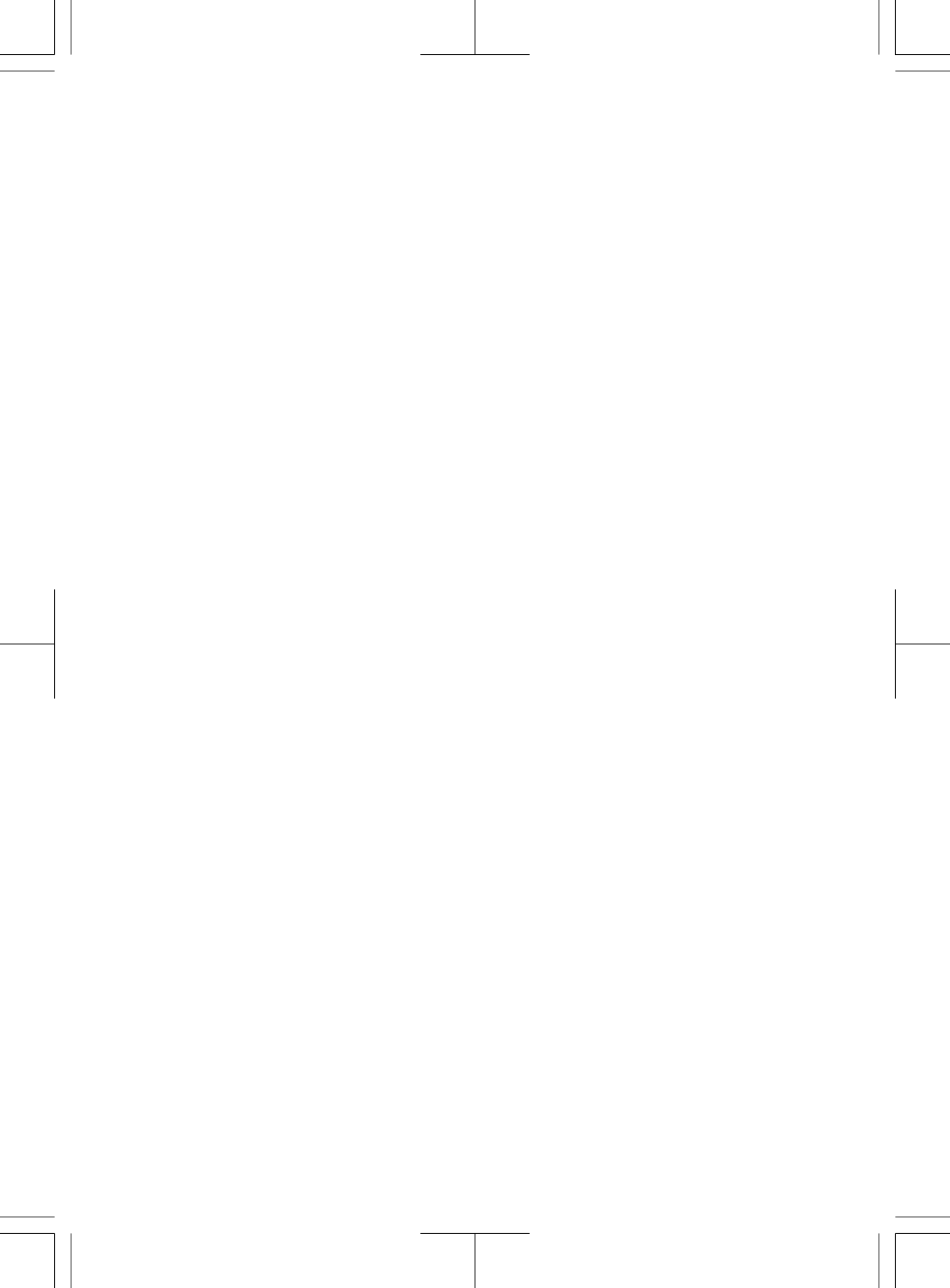
チャペルや付設のキリスト教センターでは、チャペルアワーの他にも、学生活動や聖書研究会、宗教講演会、コンサートなど様々な行事を行っています。詳細はキリスト教センターの掲示板をご覧ください。

チャペルの開館時間は、原則、平日の「8時45分～16時45分」です。皆さんのための空間ですので、最低限のマナーは守りつつ、気軽に利用してください（大声でのおしゃべり、飲食はご遠慮ください。）

ピアノは練習のためであれば使用可能です。また、パイプオルガンの使用については、必ず事前にキリスト教センターにご相談ください。

チャペルの中で静かに自分と向き合い、語りかけ、そして内なる声に耳を傾けると、新しい導きをそこに見出したり、また何か発見があるかもしれません。ぜひ、チャペルに足を運んでみてくださいね。





チャペル・ブックレット

宗教部では今までの「宗教講演会」等のお話をブックレットにまとめています。ご希望の方は、キリスト教センターへお問い合わせください。大学ホームページからもPDFファイルでご覧いただけます。

- No.1. 「経済の論理と人間の論理」(塩沢 美代子)
- No.2. 「心を問い続けて」(谷 昌恒)
- No.3. 「国際化時代におけるキリスト教の使命」(徐 洗善)
- No.4. 「激動化する現代史と神のみことば」(池 明観)
- No.5. 「生きることの感動」(金 纓)
- No.6. 「生きるよろこび」(村田 佳寿子)
- No.7. 「心を支えているもの」(山本 将信)
- No.8. 「主の愛この眼にありて」(武岡 洋治)
- No.9. 「日本におけるキリスト教主義大学の使命」(池 明観)
- No.10. 「いのちを支えるホスピスケア」(相木 哲夫)
- No.11. 「天と地のひびき」(小塩 節)
- No.12. 「絵本のちから」(松居 直)
- No.13. 「ハイジ、クララは歩かなくてはいけないの？」
—こどもの物語と聖書に見られる<しょうがい者>差別—
(荒井 英子)
- No.14. 「お父さん、僕はなに人？一問(はざま)から読む聖書—」
(金 永秀)
- No.15. 「人権・生命の尊厳—野宿生活者の現場から—」(松本 普)
- No.16. 「地球に、そして日本に生まれて今ここにいる」(太田 信吉)
- No.17. 「メイク・ア・ウィツシュ〜夢の応援団」(原 順子)
- No.18. 「人間関係を生きる知恵」(島 しづ子)
- No.19. 「命のことば」(水谷 誠)
- No.20. 「宗教が戦争の原因？—神教がアブナイ？」(桃井 和馬)
- No.21. 「福田敬太郎——神に向き合った生涯」(小野 静雄)
- No.22. 「F.C.クラインと『敬神愛人』」(黒柳 志仁)
- No.23. 「祈りつつ学び、感謝しつつ働く」
—内村鑑三、名古屋英和学校赴任のころ—(葛井 義憲)
- No.24. 「NHK連続テレビ小説『エール』とキリスト教
キリスト教主義大学が大切にしたいこと—『敬神愛人』(西原 廉太)
- No.25. 「『迷い出たダンゴムシのたとえ』がわたしたちを生かす」
(早瀬 和人)
- No.26. 「中山間地のソーシャルワーク」(越智 祐子)